



Shin-Kobe 漢方薬だより

3月号 (Vol.8)

皮膚疾患と漢方

お肌のトラブルはさまざまで、明らかに「ブツブツができて」「ただれてジュクジュクしている」ような場合には現代医学が効果的である場合が多いですが、漢方では皮膚の症状や全身のコンディションによって処方を使い分けます。

たとえば「乾燥してカサカサする」ような場合、漢方的には「血虚」といって、からだの栄養分の不足ととらえ、加齢や過労、睡眠不足のほか不規則な食生活、無理なダイエットなどで生じやすくなります。

皮膚の乾燥のほかに、髪の毛が抜けやすくなったり細くなる、爪がもろくなる、立ちくらみ、目のかすみ、筋肉のこむら返りやひきつりなどが起こりやすくなります。

このような場合には、血虚を改善する生薬である、地黄、当帰、芍薬などをふくんだ漢方薬を使用します。基本となるものとして四物湯（しもつとう）があります。地黄、当帰、芍薬、川芎という四つの生薬を含んでいることから四物湯ですが、様々な漢方薬の基本となっています。

皮膚に赤みや熱感などがある場合には、四物湯に熱を冷ます作用のある黄連解毒湯が合わさった温清飲（うんせいいん）という処方を用います。さらに温清飲から、かんの強い小児期の湿疹によく用いられる柴胡清肝湯（さいこせいかんとう）、顔や喉などに慢性炎症のある場合にも用いられる荊芥連翹湯（けいがいれんぎょうとう）、泌尿器科領域の炎症にも用いられる竜胆瀉肝湯（りゅうたんしゃかんとう）などが作られています。高齢者の皮膚乾燥や痒みには当帰飲子という、これも四物湯が基本になっている処方があります。

お肌のトラブルに対して皮膚や全身の漢方的な診察も重要ですが、食事や嗜好品などが影響していることもあり、日常生活習慣すべてを考えてみる必要があると言えます。



副院長：岡田 直己

糖尿病・内分泌・漢方内科 新神戸おかだクリニック

電話：078-241-1350